

今なぜ日本語力が求められているのか

— 永遠の課題である「読解力」を向上させるためにも必要な日本語力 —

代々木ライセンススクールでは、日本語の知識とその正しい使い方を、オリジナルテストと解説動画より学ぶことができる「日本語検定®で学ぶ！日本語力アップ教室」を2018年10月1日に開講しました。代々木ゼミナール教育総合研究所の佐藤所長に、今、なぜ日本語力が求められるのか、お話を伺いました。



代々木ゼミナール教育総合研究所
所長 佐藤雄太郎氏

「日本語検定」と聞いたとき、《外国人向けの日本語能力を測るテスト》と思いましたが、日本語の運用能力を測るテスト（日本語を使うすべての人のための検定）と聞いて、最初は驚きました。「日本語を使う日本人にとって、日本語の検定は必要なのだろうか」と。

タイムリーな話題として、2018年9月25日に、文化庁が2017年度に実施した「国語に関する世論調査」の結果を公表しました。「日本語を大切にしている」と回答したのが24.4%と、前回2015年度に調査したときよりも13.6%も低く、調査開始の1995年度以来、減少に転じたのは初めてだそうです。なるほど、メールやSMSが普及し、今や短文でのやり取りが標準化しつつあるなかで、メール、レポート（報告書）、伝言メモ、手紙文など、“形式”や“体裁”に大きな変化はないにせよ、それぞれの文章における日本語の“使われ方（語法）”は、大きく変わってきているのではないかと、つまり、日本語を使うことに対して、「拘り」がなくなっているのではないかと思います。

私も日本語の使い方に自信を持ってない一人ですが、例えば、仕事でメールのやり取りをしていると、「佐藤所長様」「〇〇部長様」（×二重敬語）とか、「やってもらっていいですか」「ご検討しちゃってください（？）」など、「？」

と思う誤用が目立つようになってきました。

ところで、OECDが行う「PIISA（生徒の学習到達度調査）」について、日本は2000年から参加していますが、2003年度には、「読解力」の得点がOECD平均まで低下し、国として「読解力向上プログラム」（2005年12月）を策定します。ただ、2006年以降も「読解力」が課題となる結果がみられ、2015年度調査でも「読解力の平均得点が有意に低下している」という結果が公表されています。

ある意味、永遠の課題とも言える「読解力」をより向上させるため、現在進行中の高大接続改革において、様々な取り組みが行われようとしています。例えば、次の学習指導要領（2020年～）では、小学校から高校まで一貫して《語彙の理解、文章の構造的な把握、読解力、計算力や数学的な思考力など基盤的学力》を定着させる内容となっています。また、大学入試センター試験に代わる共通試験「大学入学共通テスト」での国語と数学による記述式の導入や、学校での日々の学習成果を測るべく「全国学力・学習状況調査」「学びの基礎診断」等でも、読解力の強化を図るための方策が打ち出されています。

こうした新しい取り組みのなかで、「基盤的学力」として特に重視される《語彙の理解、文章構造の把握、読解力》は、まさに「国語力」といわれるものであり、その基盤たる基盤となっているのが日本語の「活用力（運用能力）」ということになるのではないかと、思っております。

SNSやメール等の発達により文章がデジタル化するとともに、日本語を活用する能力の“デジタル化（漢字変換、辞書変換機能をイメージしてください）”も同時に進む現代だからこそ、自らの日本語が正しい運用をしているのかどうか測るツールとしての「日本語検定」は、今後ますます必要なツールだと考えています。また、受検した内容を「どのように活用させるか」ということも重要であり、今回、代々木ゼミナールが開発した「日本語検定®で学ぶ！日本語力アップ教室」は、活用力を高めるヒントを与えてくれる講座だと思っております。

この講座が、日本語の運用力／活用力をどのように高めてくれるのか。私が概要を解説するよりも、実際に講座を担当した船口明講師に聞くのが一番だと思いますので、次回に譲りたいと思います。